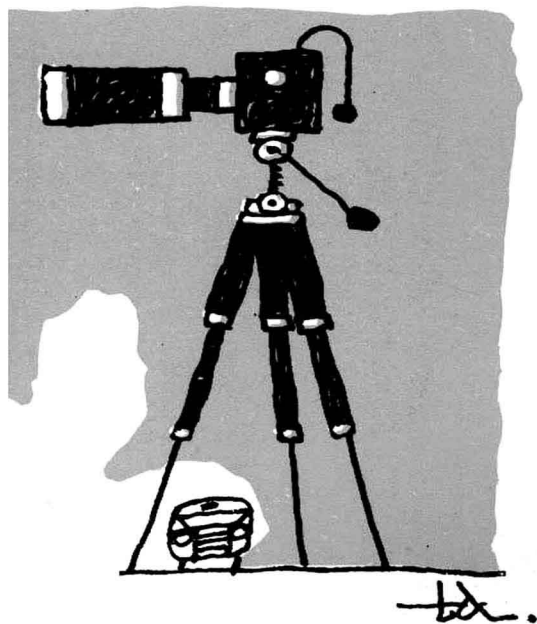


銀のいづかに

銀のいんげんとう

阿川弘之

講談社



<同じ著者によって>

眩燈（長篇小説）

あひる飛びなさい（長篇小説）

ぼんこつ（長篇小説）

カレーライス（長篇小説）

黒い坊ちゃん（長篇小説）

講談社

講談社

講談社

講談社

講談社

銀のこんぺいとう

1969年2月28日 第1刷発行

著者 阿 川 弘 之

発行者 野 間 省 一

発行所 株式会社 講 談 社

東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112

振替東京 3930

電話東京(942) 1111 (大代表)

定価 380円



© Hiroyuki Agawa 1965

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えます

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 山晃製本株式会社

長篇小説

銀のこんぺいとう

装帧
宫田
武彦

赤灯

1

夕暮れの青山通り。

渋谷から赤坂見附さきまで、未だ出来たての、広々とした美しい道である。

両側には、新装の商店やレストランと共に、高層アパートが、たくさん建ち並んでいるので、アパニユウという異名がある。

このアパニユウが、今突貫工事中の渋谷で、線路の下をうまくくぐりぬけると駒沢までのオリンピック道路、放射四号線が完成することになる。

アパニユウという英語が、ほんとにあるのかどうか知らないが、たしかに、これは、外国の大都会の大通りのような美事な景観であった。

夕方のラッシュも、そろそろ峠をすぎて、間もなく街路灯に一せいに青白い灯がともる時刻——。

下りはかなり混んでいるが、上り赤坂方向へは、車もうなめらかに流れはじめている。

一台の白バイが、その青山通りを、赤坂見附へ向って走っていた。

白バイは、二つ三つ、車の間を縫って抜けると、

「東京——仙台——盛岡——青森。特急定期便」

と、赤い字で大書した大型トラックの死角に入って、びたりとうしろについた。

定期便トラックの会社名は、「みちのく運輸」と読める。

これから夜通しで、仙台あたりまで行くのだろうか、「ダンブが黙るみちのく便」

と称して、荒い運転でかねがね眼をつけられている運送会社である。

七トン半積みみのトラックは、怪物のように、まっ黒な排気ガスを噴いて、スピードを上げそうにするが、もう一と息で違反というところになると、落してしまふ。

「駄目だよ、お巡り」

運転台では、毛糸の腹巻にサンダルばきの若者が、にやつと頬をゆがめて、憎々しげにつぶやいている。

「とっくに気がついてら了。ケツにたかった虻が見えないように、定期便がやれるかヨ。早く抜いて、前の奴を

追っかけナ」

青山一丁目の信号にかかる。

トラックが、ブレーキの音をきしませて止まる。白バイも、そのうしろに止まる。

若い運転手の悪口が聞えたわけではあるまいが、やがてシグナルが青になると同時に、白バイはぐいとハンドルの切つて、定期便の右へ出た。

「へん」

トラックの運転手は、流し目に白バイを見て、口笛を吹いてみせた。

白バイは振り向かない。人にきらわれるのは、覚悟のシヨウバイである。

それより彼は、信濃町方面から、一丁目の注意信号すれすれで入つて来て、左折した一台の黒いセドリックが、前方、広い一直線の道を、いい調子で飛ばしはじめたのを認めた。

「七十キロ以上出してるぞ」

そう判断した。

エンジンの爆発音が高くなつた。

白バイの速度計の針が、右へ、ピンと強く振れる。

相手は、気づいていない。

白バイは、追尾に入る。

みちのく便との距離がひらき、前のセドリックとの間隔が、みるみるちぢまる。

まだ相手は気づかない。

初夏の夕方の風が、はげしく警官の頬を打つて来る。

「七十五、——七十、——六十八」

「気づいたかな？」

白バイの警官は、前後左右に神経を配りながら、自分のスピード・メーターを読んでいた。

道はゆるやかに左へ曲つて、赤坂見附への下り坂にかかる。

「六十八、——七十、——七十二、——七十」

「よし！」

警官は赤灯のスイッチを入れた。

メーター・ストップのボタンを押す。

サイレンのレバーを引く。

三つの動作は、ほとんど同時である。

黒塗りのセドリックが、バックミラーの中に、二つの赤ランプが光るのを見、あの特有のサイレンの二と声に、ハッとした時には、警官の左手が、

「左へ寄せてとまれ」

のサインを出していた。

停止した車の前へ出て、警官は白バイから下りた。

「お急ぎのところを恐縮です。免許証をお願いします」
挙手の礼をして、車の窓からのぞきこむ。

もしかして酒気を帯びていないか——、のぞきこむのはそのためである。

「免許証？」

蝶ネクタイをしめて、きちんと夏背広を着こんだ、五十年輩の恰幅のいい男がハンドルを握っていた。

「一体、何だい？」

「何だい」ということはあるまいと思うが、口論は無用である。

こんなのは、とぼけ上戸^{じょうと}も序の口で、まあ、泣き上戸よりは始末がいいと思わねばならない。

「同乗者ナシ、酒気ナシ」

警官はそう確認してから、

「スピード違反です。何か、お急ぎでしたか？」
と訊いてみた。

2

相手は、免許証だけは素直に出したが、返事はしない。
い。

運転経歴は四年。違反は書きこんでない。

「では、車検証を持って、下りて来て下さい」

警官がいうと、蝶ネクタイの男は、

「君々、これ、分るかね？ これ」

と、自分の背広の襟のところをつまんで見せた。

警官は、見た。

すぐ分る。

議員のバッジである。

「ああ。国会議員の先生ですね」

彼は言った。

「そうだよ」

相手は、やや満足そうに答えた。

「国会へ急いでいたから、少しスピードをオーバーしたかも知らん」

「少しではないですよ」と言いたかったが、議員にはうつかりした口はきけない。

「それは、御苦勞さまです。本会議ですか？ 先生」

白バイに敬意をはらわれているとうぬぼれた男は、態度が少しやわらかくなった。

「いや、本会議じゃない。法務委員会が、今始る時刻なんだ。どうだい、君。君たちも、一度国会を見学に来たまえ。歓迎するぞ」

「ありがとうございます」

「じゃあ、いいね？ 少し急いで、心配かけたな」

議員は、警官の手から運転免許証を取り返そうと手を伸した。

「ちょっとお待ち下さい。お急ぎのそこ、恐縮ですが、すぐ処理しますから、車検証を持って、下りて、スピードを一応確認していただきたいんです」

「おい、おい」

相手はたちまちもとの態度にかえった。

「君、取り締りも、時と場合によるだろう？ 許せないというのかね？」

その高飛車なものの言いに、二十八歳の警官は、ちょっと沈黙した。

「それじゃあ訊くがね、君。砂利トラを追っかける時、君たちが七十キロでも八十キロでも出して、それはスピード違反になるか？ ならんだらう？ どうだ？」

「それは、役目ですから、なりませんです」

「同じことだよ。同じこと」

議員は言った。

「お互いに、公務じゃないか。国事で急いでおる者を、手間を取らせることは無いんだよ、お前」

それは、屁理屈というものであろう。

白バイは、カチンと来た。

違反者に向つて、「お前」などと一と言いつたら、た

いへんなことになるが、こちらは、「お前」と言われようが、「ジャガイモ」と言われようが、我慢するより手は無い。ただ、こうなったら、もうコンリンザイ勘弁しただけである。

「とにかくしかし、車検証を持って、下りて来ていただきます」

白バイは鄭重にくりかえした。

国会議員は、熊の胆を飲んだような顔をして、荒っぽくドアを開け、渋々下りて来た。

「五十キロ制限のところを、七十キロ出ておりました」

警官は、自分のオートバイの速度計を示した。

「二十キロ、オーバーです。御確認願えますか？」

相手は、ろくに見ようとはしなかった。

そして又、文句を言い出した。

「僕はね、河野君にも言ったんだ」

「は？」

「河野君だよ。建設大臣の名前を知らんのか？」

建設大臣と、ほんとに君、僕の間柄なのかどうかは分らないが、警官は黙っている。

よけいな会話には、巻きこまれない方がいい。

「この青山通りは」

と、交通違反の国会議員はつづけた。

「一日も早く開通させると、僕は河野君にも、やかましく言ったんだ。それから開通した以上は、諸外国なみの道路が出来たんだから、制限速度も外国なみに上げろ、経済効用の見地からも、実状に則さん制限は、いかんね」

「……………」

「お前、見てみる。あの車、あのトラック、みんな七十分キロぐらいは出しておるじゃないか。つかまえるなら、どうしてあれを、全部つかまえない？」

「先生、それは無理ですよ」

警官は答えた。

「私たちは、全部つかまえないんですがね。先生方が、国会で、予算を認めて下さらないから、白バイの絶対数が足りないために、たまたま先生だけつかまえてしまっただんです」

「ふん」

議員は、鼻を鳴らした。

3

相手の口数が少なくなったときに、彼は、白バイのうしろの白い書類箱の上で、手早く書類を書きはじめた。相手によっては、こんな場合にも、気は許せない。

うつむいて書類を書いている間に、ジャッキの鉄棒で頭をぶんなぐられて、免許証を奪い返して逃げられてしまった同僚がある。

ふらふらになって帰って来て、

「間が抜けとるゾ」

と叱られたりしては、割に合わない。

しかし、国会議員の先生には、そこまで心配しなくてもいいであろう。

「墨田区の交通裁判所へ、出頭していただくことになりませんが、十日と十一日と、どちらが御都合がよろしいですか？」

書類を書き了えながら、彼は訊いた。

議員は、今や、若いお兄さんと同じようなふてくされ方になって来た。

「どっちでもいい。お前の好きなようにしたらいいだろう」

「いや。好きなようには出来ません。先生方が決められた法律通りに処理しなければなりませんので」

「お前、若いくせに、相当小生意気な口をきくね。名前は何というんだい？」

議員は、靴の先で、白バイのタイヤをいまいましげに蹴りながら言った。

「只今さし上げる書類に、書いてあります。免許証は規定によって、お預りします。これが保管証ですから、出頭の日まで、これで運転して下さい」

白バイの警官は答えた。

「どうも先生、たいへんお待たせしました」

国会議員は、舌打ちをした。

渡された違反通告書を見ながら、セドリックの運転台に戻ると、

「市川か。市川源三郎か。かたい男だな。融通のきかん、馬鹿な奴だ。ストーニー・ヘッド、石頭だ。お前のような石頭につかまった機会に、おれも日本の警官の質の向上について、折角国会で少し論議してみよう」

と、捨てぜりふを残して、エンジンをかけ、走り去って行った。

町は暮れはじめていた。

流れて行く車が、みんなもう、スモール・ライトをともしている。

市川源三郎の白バイは、一と足おくれて、走り出した。彼は、少々気が滅入って来た。

きらわれるのは覚悟の上とはいうものの、ああえげつなく悪口を言われると、悲しくなるのである。

流れている車が、彼の姿を見て、みんな一段スピード

を落している。

親愛の眼で見てくれる運転手は、一人もいはいない。無関心を装っているか、にやにや笑っているか、それではなければ、はつきり憎しみの眼が光っている。

交替時間は、とくに過ぎていた。

白バイは、赤坂から四谷見附へ上り、四谷の賑かな通りを、新宿御苑に近い分駐所へ帰って来た。

第一交通機動警ら隊、四谷分駐所――。

ここが、市川源三郎たちの基地である。

先に帰った隊員どもの白バイが、ずらりと並んでいた。

ガレージには、四輪小隊のバトロール・カーが三台入っている。

薬屋と印刷屋とにはさまれた、きたない五階建の古ぼけたビルディング。下には、信友会とか、全国防犯協会連合会とか、警察関係の団体がいくつが入っていて、その五階を、白バイの四谷分駐所がもらっている。

市川源三郎は、オートバイを止め、ライトを消し、キイを抜いて、書類を片手に階段を上りはじめた。

各階の踊り場に、つつじや、沈丁花、ユッカなどの鉢植えが置いてある。

そして、

「お疲れさんです、七合目」

「あと一息の、八合目」

「いこいほそこに、九合目」

と、一階ごとに立札が立っている。

いい若い者が弱音を吐くようだが、白バイの装備は重い。その上、乗ってばかりいるので、脚が弱くなっている。一日に何度も、この階段を五階まで上るのは、まったく「お疲れさま」なのである。

九合目の——つまり、四階から五階への踊り場の立札を、鉛筆で一字書きかえて、

「いこいほどこに？ 九合目」

と、いたずらをした奴がいて、

「みっともない。消して来い」

と、いつか小隊長に怒られたことがあった。

「異状ありません」

ふッと息を吐いてから、市川源三郎は、大声で報告し、もう電気のともらった五階の二輪小隊の部屋へ入って行った。

4

すると、打てばひびく勢いで、

「御苦労さん」

「オッ、御苦労さん」

と、部屋の中から、荒っぽい声がかかった。

白バイの隊員というのは、みんなやたらに声が大きいです。

だから、「御苦労さん」

が、まるで道場で、

「エイ、ヤッ」

と、気合いを入れられているような感じになるのである。

「あら、お帰んなさい。疲れたでしょう？」

などと言ってくれる人間は、茶汲みの梅干婆さん一人、いはしない。

まったく、色気もうるおいも無い、殺風景なところだ。

「源さん、おそかったじゃないか」

班長の沼田巡査部長が、声をかけた。

何しろ、まともな車は相手にしないのだから、帰りが少しおそいと、すぐみんなが事故を心配するのである。

沼田班長は、襟章に銀色のこんぺいとうが二つついていて、ここでは、下士官の格であった。

市川源三郎たちは、こんぺいとう一つの兵隊である。「帰ろうと思つたら、厄介なのを一台つかまえちゃっ

て、あれこれ言われて、すっかり時間食っちゃったんです」

市川源三郎は、答えながら、白いヘルメットをぬぎ、帯革をはずした。

眼鏡を取り、首から白いマフラーを抜く。

装備品が一つ一つ取れるにつれて、いかめしい白バイの、市川源三郎は、少しずつ、通称の「源さん」らしくなるのであった。

「何だ？ 夕方から酔っぱらいか？」

「いいえ」

「女か？」

「国会議員ですよ」

源さんは、預って来た議員の先生の、免許証を出してみせた。

「そうだな。女なら、源さんも、そんなゲンナリした顔して帰って来ないよナ」

同僚の伊木巡查が、机の上で書類の整理をしながら言った。

「おれ、この前さ」伊木はつづけた。「きれいな女の子をつかまえたんだよ。何かお急ぎでしたかって訊いたらね、急いでの、わたし、緊急事態なのって——」

「は？ って、おれが言ったらサ、お巡りさん、分るでしょ。女の子にあんまり恥かかないでよ、わたし、我慢出来ないの」

「便所か？」

「そうよ。すぐあの先に、お友達のうちがあるから、今、駆けこむとこののって、腰ふってみせるんだもの」

「それで、勘弁したのか？」

沼田班長が訊いた。

「嘘だろうと思ったけどね。女の便所へついて行くわけに、行かないですよ。勘弁しちゃった」伊木巡查は言った。「しかし、あんなのはさ、たまには、この前はお世話になりましたぐらい言って、花でも持って上って来ないかね？」

「馬鹿なことを考えるな！」

班長がどなった。

ほんとに、花を持って女の子が上って来た日には、一週間くらい分駐所の噂のタネになることは、確かだが、めったにそんなことは起らないのである。

女性ドライバーがふえて、彼らも町で、

「お嬢さん、免許証をお願いします」

と、若い娘に接触する機会は、しばしばあるが、それはまあ、産婦人科の医者が若奥様を診察しているのと同

じで、そこで妙にいいなど求めていたら、けしからんことになる。

班長は、源さんの出した免許証をあらためながら、「知らんね、こんな名前の議員さん」と言った。

「だけど、源さん、大丈夫かい？」

「何がですか？」

「あとで、とやかく突っこまれるような口はきかなかつただろうな？」

「分ってますよ。ぐっと丁寧に、学習院言葉で応対して来たから」

源三郎巡査は答えた。

5

その時、伊木巡査が、机の下に足を投げ出しながら、「大丈夫も大丈夫でないも、ハナから、そんなものはよしいのに、源さん」と口を入れた。「そんなの、どうせどこから手がまわって来て、貰い下げだぜ」

「じゃあ、どうすりゃいいんだ？」

源三郎は、ちょっとしゃくにさわって、伊木の方を見返した。

「貰い下げしそうなのは、のっけから全部見逃す方がいい

いのか？」

「……………」

「ついでに、何でもかんでも、全部勘弁しまえば、一番愛される白バイになれるが、君は、その主義か？」

「なにイ？」

伊木が顔を上げた。

「おい、コラ、よせ」班長は言った。「すぐ頭に来るような奴は、白バイの資格なしだぞ」

なにぶん、柔道三段、剣道二段というような若いのばかり揃っていて、茶汲み婆さんのケも、タイピストのケも皆無だから、むしろしゃした気分でうっかり議論をはじめると、すぐ殺伐な空気になって来るのである。

「まったくしかし、いやらなっちゃった」源三郎は、そこで話をそらせた。「せいぜい丁寧に言ってるのに、お前、お前って、石頭扱いされて、気が滅入って来るよ」「馬鹿野郎。源さんも源さんだ。そのぐらいいのことで、弱音を吐いて、気を沈ませる奴があるもんか」班長が大声で言った。「白バイは、忍の字よ。忍の一字よ。ほこり箱に、ほこりでもたくさん落して、忘れて来い」

半月ほど前のことである。

「一体、おれたちの顔のほこりって、どのぐらいの量取れるもんかな？」

という話が出た。

「よし、ためてみようじゃないか」

ということになり、それ以来みんな、カステラの空き箱など持ち寄って、ほこりの収集につとめている。

一ヵ月で一番たくさん、顔のほこりを落した者に、小隊長から賞品が出ることになっている。

源三郎はしかし、ほこりを落す前に、机の上の薬罐から、麦茶を一杯ぐつと飲んで、

「ああ、うまい」

と、口のしずくをぬぐい、便所に立った。

仮眠所の横の、「男子手洗所」である。

「女子手洗所」も無いくせに、どうして「男子手洗所」という札をぶら下げておくのかと、毎度のことながら、源三郎は思う。

小便是、黄色く濁っていて、量が少なかった。

白バイが、町角で立小便というわけには行かないから、出勤の前には、湯水を節しているのである。

日が暮れて、便所の窓から、新宿の町の灯がよく見える。

源三郎は、まったくのところ、気が減入って、何だか面白くない気分であった。

「小母さんのところへよって、帰るか」

彼は思っていた。

こんな晩には、一杯やりたくなる。

暗い電灯で鏡を見ると、顔いっぱい油じみたほこりが、黒くこびりついて、めがね猿みたいに、眼鏡のところにだけ白く、まが出来ている。

彼が二輪小隊の部屋へ戻ってみると、班長は、「まったくそうだぜ。何てったって、おれたちは、警官の華ヨ」

と、いささか浪花節口調で、説法をはじめていた。

「だから、忍の一字の信念で、常に誇りを持ってやれというんだ」

源三郎は、

「市川専用」と、マジック・インキで書いた木箱に、顔のほこりを落しながら、傾聴することにする。

ほこりも身の内で、ふけ、鼻クソ、足の皮などと同様、大事にしてやると、妙にしたしみが湧く。

「人は知らずともヨ」

班長はつづけていた。

源三郎は、浪花節にはあんまり趣味が無いが、沼田班長は好きである。小ぶとりで、生きがよくて、愛妻家で、親分肌で、こういうあけっぱろげの人物は、何かの時に、兄貴分として、大いに頼りになる。

「人は知らずとも、悪には強く、なさけに弱い、大慈大悲の觀世音菩薩の信念でなくちゃあ、白バイなんて、こんなつらい商売が、やれるもんか」

「へえ……。觀世音菩薩は、悪には強く、なさけに弱いですかねえ」

伊木巡査が口を入れた。班長にくらべると、伊木は少し陰性で、皮肉屋である。

「そりゃ、班長。仁王さまか何かの、まちがいにゃないかなア?」

6

「だまって聞いてろ」

沼田班長は言った。

「大慈大悲の觀音さまというのはさ。おれたちは、何も違反者をつかまえるのが目的じゃない。事故を無くすのが、目的なんだ」

「だけど、事故は、無くならないね」

伊木巡査が言った。

「いくら、えらい人が、交通安全週間 何度やってみても、事故は無くならない。こういう名案を考えた人がいるんですがね」

「何だい?」

「日本中さ、右左折禁止、Ｕターン、後退、駐停車全部禁止にしようとか、仕方がないから車はみんな海へ飛びこんで、事故は完全に無くなる」

「馬鹿野郎。茶化すな」と、班長はつづけた。

「おれが言うのはヨ、おれたちが走ってること自体に興味があるということなんだ」

「……………」
「事故は無くならないかも知れないが、へらすことは出来る」

「……………」
「おれたちが町を走って、無茶な運転をする車がへれば、その分だけ、誰か、誰も知らないが、毎日誰かが、轢き殺されずに助かってるんだ」

「……………」
「これは、大したことだよ。觀音さまだというんだよ。」

だから、馬鹿と言われようが、チョンと言われようが、税金泥棒と言われようが、誇りを持ってやれということなんだ」

「そうかも知れないけど」
と、伊木はまた口を入れた。

「考えてみりゃ、損な商売だよ。大慈大悲の觀世音に

しては、少しきらわれ過ぎるよ」

「そうかな？」

と、沼田班長は言った。

「きらわれるきらわれるって、これも、態度と話術ひとつだと思うんだが、君たちは、そんなにきらわれるか？」

「きらわれますね。一切の衆生から、こんなにきらわれる観音さまは、いないですねえ。——班長は、神経が丈夫に出来てるから、きらわれても、あんまりピンと来ないんじゃないか？　なあ、源さん？」

と伊木は、源三郎に同意を求めた。

「そりゃ、時々淋しくなつて、考えこんでしまうことは、あるよな」

市川源三郎は答えた。

「こいつは、まだ言つてやがる。どうも、源さんは気が弱くていけない」

班長は言った。

「さあ、しかし、こんなことを言つても、仕方がない。早いとこ片づけて、帰ることにしよう」

「おれも、そうしよう」

源三郎も、伊木と机を並べて、書類の整理にとりかかった。

となりの四輪小隊の部屋から、馬鹿でかい話し声が聞えて来る。

「きょうは、何曜だ？　また、午前さまが多いぞ」
などと言っているのが、筒抜けである。

白バイ隊は、このあととはもう出ない。

これから夜半にかけては、東京の町は、四輪交通バトロール・カーの舞台になるのである。

「それじゃ、お先に」

「お休み」

「お先に。お休みなさい」

と、こちら二輪小隊の方は、次々に隊員たちが、帰りはじめた。

「さて、それでは、おれもそろそろ帰るか」

と、沼田班長も、大あくびをして、着替えに立った。

おそく帰隊した源三郎は、結局一番あとに取りのこされた。

彼が、書類を片づけおわった時には、白バイ隊の部屋は、がらんと、淋しくなつてしまつていた。

部屋のすみを、ベニヤ板で仕切った更衣室に入つて、

源三郎は制服を安物の背広に着替えた。

そして、彼が赤いネクタイを結んで、更衣室から出て来た姿は、もう白バイの警官には見えなかった。